

『野ざらし紀行』新たな写本研究—名称寺蔵『芭蕉行脚乞食袋』—

三木 慰子

A NEW MANUSCRIPT RESEARCH of NOZARASHIKIKOU —BASHOANGYAKOTUJIKIBUKURO of MYOUSHOUJI TEMPLE—

Yasuko Miki

1. 奈良県名称寺について

奈良県名称寺に伝わるものに二見形文台と『芭蕉行脚乞食袋』という写本がある。これらは『芭蕉翁生誕 370 年 平成 26 年度 (第 68 回) 芭蕉祭記念特別展 俳諧中興時代—芭蕉に帰れ—』(芭蕉記念館編、平成 26 年刊)によると「一對のものであったと伝えられている」と記されている。

同書による名称寺と資料の説明を次に引用する。

名称寺は永正九年(一五一二)に善法院二條名称寺として、大和高田曾根の地に建立された。ご住職たる日野家は公家の日野家の支流であり、二條家(銅駝)から妻室を迎えたことにより、二條御所と呼ばれ、「二條」を冠したまま現在に至っている。江戸時代の安永六年(一七七七)には当時の住職暢典が二條家から和歌相伝の免許を受けるほか、文芸的にも経済的にも二條家との結びつきは昵懇であったと考えられる。明治維新になって、京都から江戸へ下ることになった際に銅駝二條家から俳諧関係の二見形文台、句会次第などの資料を受け継いだ。明治末頃、本願寺の負債の一部を負担するために伝来の日野家の文物の多くを手放すことになった。しかし、その後、再び名称寺の所蔵に戻った資料があり、今回展示した二見形文台もその一つである。

名称寺は公家の日野家の分家で、室町時代から由緒ある寺院であり、二条家とも交流があった。明治 23 年、二条基弘は上田聴秋に花の本を免許し、翌年京都の大雲寺で二条家俳諧を催した。日野家と二条家の関係から名称寺に二条家関係の資料も入って来たものと思われる。院主日野恵隆氏によると、日野家に移譲された資料は、

山崎宗鑑真筆「南無天満大自在天神」軸幅、芭蕉直筆による「任口上人宛書簡二通」「木因宛書簡」「猿蓑の発句(時雨の句)」「さわらびの句」の懷紙

などである。

思い返せば、平成 26 年秋、俳文学会全国大会の会場で当時、芭蕉記念館に勤務されていた早川由美氏からお声をかけていただき、平成 27 年 7 月 19 日、名称寺の資料調査をする機会に恵まれた。日野氏は開口一番に『芭蕉行脚乞食袋』は芭蕉真筆に違いないと話され、筆者に鑑定依頼をされた。その日、日野氏より執筆中であつた同書に関わる本の草稿のコピーをいただき、数日後に「残念ながら、『芭蕉行脚乞食袋』は芭蕉自筆とは言い難いのではないか」とお電話で話をしたが、平成 28 年 3 月 19 日、京都俳文学研究会で研究発表をした折、『芭蕉翁桃青』(平成 27 年 10 月刊、私家版)と題された完成した出版物を頂いた、その本の序文には、

私は今日日野家に所蔵されている通称名である「甲子吟行」もしくは「野ざらし紀行」といわれる芭蕉の代表作である原本の存在を明らかにしようと思っている。おそらくこれは「泊船本」の原本と目されるもので、曾良が芭蕉の歿後、芭蕉が自分の手元に於いて使用していた「二見浦文台」と「野ざらし紀行」の原本(甲子吟行の卷子本とされているがそうではない)をたずさえて信濃へ持参していったものであろうと考えるものである。

と記し、「真贋を判定するには筆跡等の鑑定を経て、多くの研究者の判断を仰がねばなるまい」と結んでおられ

た。同書においては、残念ながら筆者の意見は記されてはおらず、筆跡や本文の諸本関係の本格的な比較研究などもされてはいなかった。

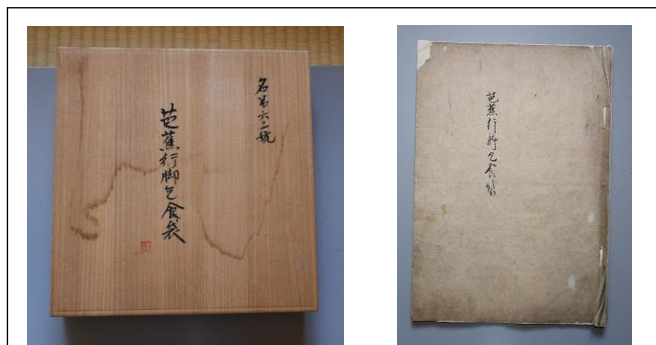
そこで、本稿では二条家ゆかりのものと思われる『芭蕉行脚乞食袋』、いわゆる芭蕉の『野ざらし紀行』の作品であるが、同紀行文における諸本の系統序列のいずれの流れをもつ写本であるのかについて、二見形文台との関わりを含めて考察する。

2. 本の体裁

(1) 『芭蕉行脚乞食袋』

『芭蕉行脚乞食袋』の本の体裁を記す。冊子の寸法は白椴色の半紙本サイズ（縦 24 cm×横 16.6 cm）で裏表紙はない。箱のサイズは 27.5 cm（横）×28 cm（奥行）×5.5 cm（深さ）。箱の蓋には日野氏により、「名第六〇

一號 芭蕉行脚乞食袋」と書かれていた。（注1）そして、名称寺にある二見形文台の入っていた箱のサイズは 54.5 cm（横）×34 cm（奥行）×11 cm（深さ）。



二見形文台の表面（横 53 cm×縦 31 cm、両端に筆返しが付されている）は二見浦と扇の模様、裏面（横 53 cm×縦 31.8 cm）には、



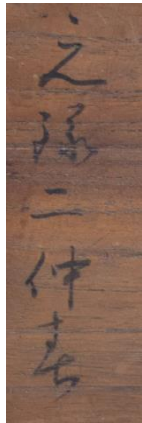
ふたみ

うたかふな 潮の花も 浦の春 はせを

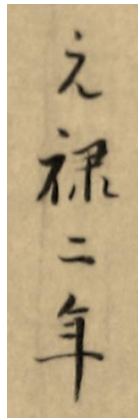
元禄二仲春

とある。「元禄二仲春」の記述のため、後に資料を付しているが、いわゆる曾良系の文台となる。では筆跡はということになるが、『芭蕉真蹟』（尾形仿監修、学習研究社、平成5年刊）に収められている元禄2年に執筆されたものを2点と『芭蕉行脚乞食袋』（名称寺蔵と記す）を並べてみたところ、次頁のようにいずれの文字も

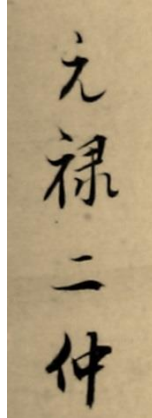
字の送り方などに類似点が認められなかった。なお、2点とは『芭蕉真蹟』に掲載されている元禄2年夏成立「きさがたの」ほか発句懐紙（石川県立美術館所蔵、石川蔵と略す）と元禄2年仲秋成立「やまなかや」句文懐紙（柿衛文庫所蔵、柿衛蔵と略す）である。



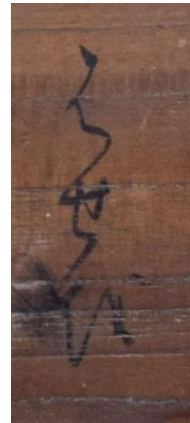
名称寺蔵



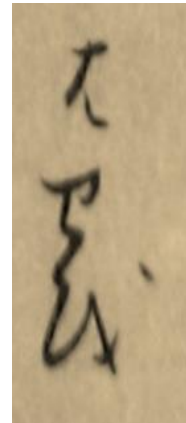
石川蔵



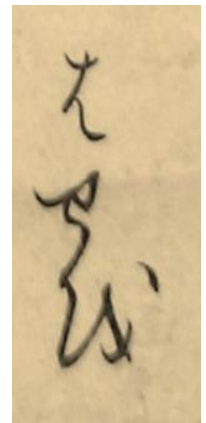
柿衛蔵



名称寺蔵



石川蔵



柿衛蔵

そして、箱の裏には次のような書き込みがあった。

はせを翁

二見文臺

明治四十二年五月

岡野知十先生より

門弟 市村燕子相伝

ち十先生 なつかしく 拝見 麦人

これより、岡野知十より明治 42 年 5 月に門弟の市村燕子に文台が譲られ、それを星野麦人が見て、感想を記したものであることがわかる。

名称寺にある文台が何故、岡野知十の手に渡ったのかという疑問について、日野氏の説明を次に掲げる。

名称寺は明治維新になり、京都から江戸に下ることになった際、銅駝二条家より俳諧関係の資料を受け継ぐことになった。しかし、明治の 30 年代に本願寺の負債の一部を負担するために二条家伝来の資料を含む宝物を手放すことになった。そのほとんどは檀家で抑えられていたようであったため、明治末頃の買い戻しが可能になった。しかし、檀家の半数は行く方知れず、手元に戻ったのは最初の 3 分の 1 であった。

推測するに、二条家資料が一時期流出する際、岡野知十の手元から弟子の燕子のもとに行き、その後、また、流出した資料の 3 分の 1 の戻り分の中に運よく二見形文台は入っており、お寺に戻ることができたというのであろうか。少なくとも、一時期、芭蕉資料の収集家であり研究家でもあった知十のもとに二見形文台があり、それが価値あるものならば、何故弟子に譲ることにしたのか、真実はどうだったのだろう。さまざまな推測が出てくるところである。

では、まずは名称寺所蔵の二見形文台は残念ながら芭蕉の真筆ではないものの、二条家ゆかりのものであるならば、伝来過程が気になるところである。どういう系統に位置づけされるものか、検討してみることにする。それにあたり、最初に二見形文台の伝来について述べたい。

3. 二見形文台の伝来について

(1) 二見形文台

そもそも文台とは『俳文学大辞典』（金子金治郎著、平成 7 年刊、角川書店）によれば、

連歌・俳諧興行の際、正面の執筆の前に据える台。これに懐紙を載せる。…芭蕉の「席に望みて文台と我

と、間に髪をいれず、思ふ事速やかに云ひ出て、爰に至りて迷ふ念なし。文台引きおろせば即ち反故也」(『三冊子』)は、文台に潜在する機能を鋭く突いている。

とあり、次に二見形文台に関しては、『俳文学大辞典』(谷地快一著)によれば、

「二見文台」とも。芭蕉が使用した文台の一つ。名称は西行が伊勢国二見浦で扇を文台とした故事による。表に二見浦の図と松を描いた扇面の墨絵、裏に「ふたみ」の題で芭蕉の「うたがふな潮のはなも浦の春」の句を記す。裏に、「元禄二(一六八九)仲春」「元禄四」の年記のある二種が伝存し、前者は曾良、後者は史邦に贈られたものという。

とある。そこで、曾良と史邦伝来の2つの文台について述べる。

(2) 曾良伝来の文台

芭蕉の甥の松村伊兵衛の孫である松村桃鏡が宝暦12年に編集した『芭蕉翁文台図』という書がある。これは桃鏡が信州贅川の青路から祖父伝来の芭蕉翁遺愛の二見文台を譲り受け、その披露の賀筵を記念して出版したものである。最初に蓼太の序があるが、それより以下のことがわかる。

文台は曾良が『甲子吟行』(素堂序・芭蕉画讃)の一軸とともに請い受け、故郷の諏訪にいたる甥笠井氏某に伝え、さらに蕉風俳諧を信奉する木曾の贅川の加流の家(息子の時風、孫の青路)に伝わった。加流の家に伝えられて40年の歳月が経過し、60歳の老齢に達した青路が山里に文台が埋もれることを惜しんで、宝暦11年冬、公務のため、東武に赴き、雪中庵において、芭蕉翁の縁者である桃鏡に『甲子吟行』とともに文台を譲ったという。

『芭蕉翁文台図』の巻頭には狩野与信(春貞)が模写した文台の表裏の両面の図、寸法、材料が記されている。すなわち、左手に二見が浦の夫婦岩と右手には松原の描かれた扇が書かれている。文台の裏面には「ふたみ うたかふな うしほの 花も 浦のはる 元禄二仲春 芭蕉」と記載されている。その後、30数名による雪中庵社中興行の「賀筵百韻」、青路の句、諸家から寄せられた賀句約100句、桃鏡の句、五斤の跋文が収められている。桃鏡に伝えられた文台の裏面には、

ふたみ

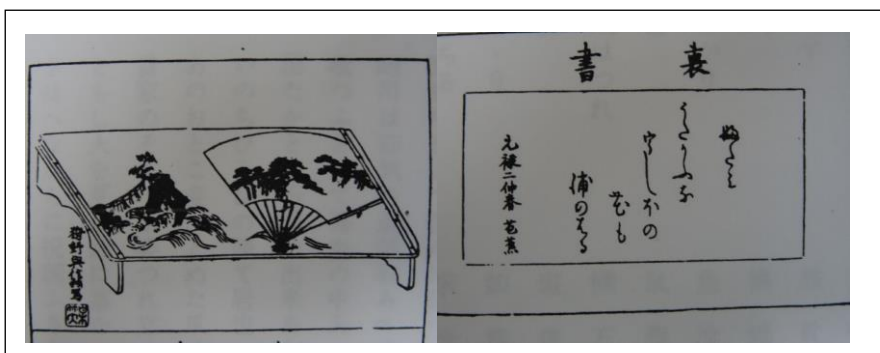
うたかふなうしほの花も浦のはる

元禄二仲春 芭蕉

と記されている。

現存する二見形文台を調査していると『美術商の百年：東京美術倶楽部百年史』掲載資料に「雪中庵伝来」とあり、曾良伝来のものかどうか、それ以上の情報は掴めてはいない。

ところで、奈良県名称寺に伝わるものに二見形文台と『芭蕉行脚乞食袋』という写本が「一对のものであると伝えられている」。曾良伝来のものが『甲子吟行』と一对をなすものであるならば、名所寺所蔵本と関係があるのかと思われてならない。曾良伝来のものには狩野与信が模写した文台図があり、山本氏所蔵のものが次頁の写真である。その写真と名称寺所蔵のものを比較すると構図的には同じものではあるが、「うたかふなうしほの花も浦のはる」の発句など、筆跡も異なり、文字の異同も認められる。



『芭蕉翁文台図』掲載二見形文台
(注2)



『俳人真蹟全集 芭蕉』掲載
二見形文台（注3）



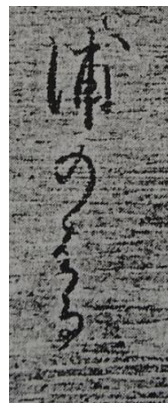
名称寺所蔵 二見形文台



真蹟



名称



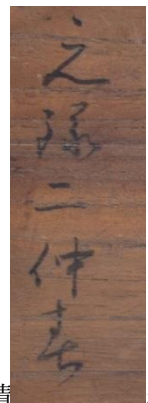
真蹟



名称



真蹟



名称

（3）史邦伝来の文台

一方、史邦が芭蕉の遺稿の散逸を惜しみ編んだ書が『芭蕉庵小文庫』（元禄9年刊）である。序には次のように記されている。

木曾の情雪や生ぬく春の草、と申されける言の葉のむなしからずして、かの塚に塚をならべて、風雅を比惠・日良の雪にのこしたまひぬ。さるを、むさし野のふるき庵ちかき長溪寺の禅師は、亡師としごろむつびかたらはれければ、例の杉風、かの寺にひとつの塚をつきて、さらに宗祇のやどりかな、と書をかれける一帋を壺中に納め、此塚のあるじとなせり。たれ／＼もかれに志をあはせて、情をはこび句をになふ。猶、師の恩をしたふにたえず。霜落葉かきのけて、かたのごとくなる石碑をたて、霜がれの芭蕉をうへし発句塚、と杉子がなげきそめしより、愁腸なをあらたまりて、

日の影のかなしく寒し発句塚

史邦

すなわち、江戸深川の長溪寺に杉風が建立した芭蕉の句碑を拝して、史邦も追慕の句を詠んでいる。そして、冬・春・夏・秋の順番で四季別の蕉門諸家の発句が配置され、その季節に適した芭蕉の遺文、連句一巻が添えられている。その春之部の巻頭にある芭蕉の2句の次に史邦の次の句が記載されている。

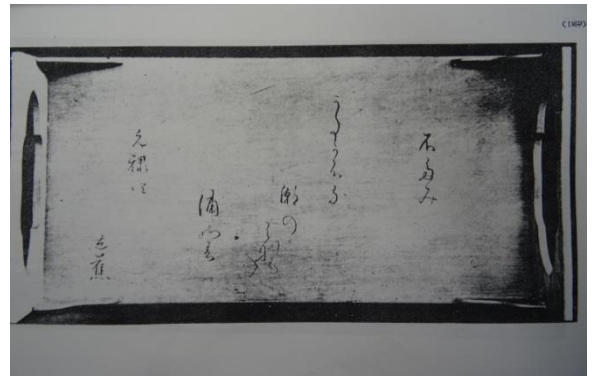
ふたみの机・硯箱は翁ふかくいとをしみて、みづから繪かき、讀したまひぬ。また、一とせ洛のぼり

に、いざさらば雪見に轉ぶ所まで、と興じ申されける木曾の檜笠、越の菅蓑に、桑の杖つきたる自畫の像、此しな／＼は、さぬる年、花洛の我五雨亭に幽居し給ふ時、一所不住のかた見とて予に下し給りぬ。されば師のなつかしき折／＼、あるは月花に情おこる時は、是をかけ、これをすえ、ひたすら生前のあらましして、句の味をうかごふのみ。む月七日はことにわか葉のあつものをすゝめて、例よりもかなしく、かしこまる袖になみだこぼれて

折そふる梅のからびや粥はつを 史邦

これより、史邦は二見の文台、硯箱、行脚中に使用した木曾の檜笠、菅蓑に添えた自画像を芭蕉から譲り受けていたことがわかる。

『日本俳書大系』（神田豊穂、日本俳書大系刊行会、大正 15 年刊）には「二見の文臺は明治になってから發見された」ことが記載されている。史邦が芭蕉からもらった二見形文台は後に能村登四郎の母方の伯父で登四郎が俳句の手ほどきを受けた山本安三郎(俳号 六丁子)が所蔵していたという。（『蕉門研究資料集成』第六、下の写真参照）



平凡社の『俳人真蹟全集』（3 卷）に史邦伝来の二見形文台が出ており、そこには箱書付けがある。また、水戸烈公の兄君の哀公遺愛と記した花押があるとのこと。記された文章は次の通りである。

芭蕉翁桃青所持二見瀉文臺、桃青門人史邦(根津宿之助と云)授與之。史邦其後江戸に來て佐々木五郎右衛門に縁所あるにより爰に滞留して永く旅宿とす。史邦病に掛て危に至り、此文臺をあるじ五郎右衛門に授く、夫より代々佐々木の家にあつて珍器とす。しかるを非是齋來道、此道に心さし深く、佐々木の家より譲りうけて柴田の家に収むる器となれり

また、『俳人真蹟全集』の序では水戸家の所有以後の伝来も明らかにしている。『史邦と魯九』（市橋鐸著、俳諧史研究社、昭和 12 年刊）では、

この二見の文臺が水戸家の手に離れたのは、何でも明治になってからで、田中光顯伯が譲りうけられた。この光顯伯は俳諧にも縁のある人で關口の芭蕉庵も一時この手にあったことがある。

光顯伯から聽雨窓主人即ち角田竹冷氏に傳つた。それは明治卅六年の十月のことで、同伯から贈られたものであることである。

竹冷氏の歿後、子息竹涼氏が所持されてゐたらしいが、現在では、真蹟全集に據れば、山本安三郎氏の手にある様である。

と記され、平成 30 年現在、出光美術館所蔵となっている。

（4）その他（支考伝来・祇徳伝来）

曾良、および、史邦伝来以外に支考や祇徳伝来のものがあると言われている。

『芭蕉句選年考』（石河積翠著、華雀編、元文 4 年成）所収「疑うな潮のはなも浦の春」の句に関して、次のような一文が記されている。

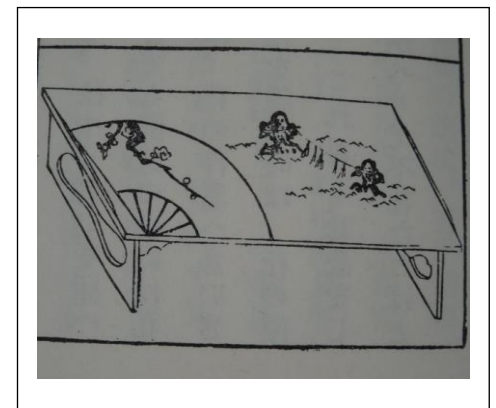
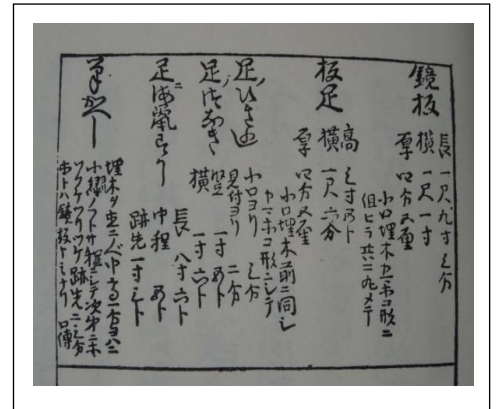
○按ずるに眞蹟集に出せる所は、松村桃鏡所持の二見の文臺の裏書なり。二見の文臺と云へるもの其形様々あり。元伊勢の二見の浦にて西行上人扉を開きて假りに文臺となしたる風流より、芭蕉思ひよりて文臺の面に扇の形書きて岩二つ注連結ひたる體を書けり。十論為辨抄に支考が出せる圖又桃鏡家蔵の圖異也、又自在庵祇徳が家に傳ふる文臺又異也、其主人の物好きによれる成るべし

これより、「松村桃鏡家蔵の圖」のもの、「十論為辨抄に支考が出せる圖」のもの、「自在庵祇徳が家に傳ふる文臺」の3種類の文台の存在が明らかである。名称寺の所蔵の文台は曾良伝来系統であり、桃鏡所持のものとはまた違うものであった。

支考の『十論為弁抄』（享保10年刊）は享保4年に刊行した『俳諧十論』に記された俳諧の本質的問題を10項目に分けて詳論したものに注解をほどこしたものである。そこには、俳席での心得を示す「五条式」や懷紙の方式、句を付けるときの作法、懷紙を載せる「文台」の規定などに関する記載がある。

二見文台ノ図

長	一尺九寸三分
鏡板 横	一尺一寸
厚	四分五厘
	小口埋木カマボコ形ニ 但ヒラ共ニ丸メテ
高	三寸五分
板足 横	一尺六分
厚	四分五厘
足ノひき込	小口埋木前ニ同ジ カマボコ形ニシテ
	小口ヨリ 三分
	見付ヨリ 二分
足ノつなぎ 堅	一寸五分
	横 一寸六分
	長 八寸六分
足海鼠すかし中程	五分
跡先	一寸三分
	埋木ヲ直ニノベ中高一分ヨハニ
筆かへし	小縁 ^{ヨリ} ノフトサ程ニシテ次第二ホ ソクケヅリツケ跡先ニ三分 ホドハ鏡板ナミナリ 口伝



『十論為弁抄』掲載二見形文台（注4）

此図は芭蕉家の物数奇なり。其故は西行談抄に、二見の浦に住給ひし比、扇を文台として和哥を詠じ、その際には一生いくばくならず来世ちかきにありといふ文を、口ずさみ給ふるよし、風雅にはこれらのさびをうらやみ、道義にはそれらの結縁をしたへばとぞ。さて、此形の用とする所は、其足のかどたゞず、畳にそひたる心地よろし。硯箱もつねよりは小ぶりに筆のつかえぬをかぎりとす。蓋のうらに海松と蛤とをかけり。されど硯箱は定法にあらず。大かたはあるにまかすべし。扇の絵は海か若松なり。おほくは木地に墨絵なれど、あさくぬりたるも又あるべし。中比より先師のうら書おほし。松か梅かの発句なり。なお、支考の伝える文台には右手に二見が浦の夫婦岩が描かれ、左手には梅の絵のある扇が描かれている。



支考伝来出羽美濃派文台(注5)

(5) 二見形文台の寸法の比較

次に、二見形文台の寸法の比較をする。

	支考 『十論為辨抄』	曾良(桃鏡) 『芭蕉翁文台図』	史邦 『芭蕉庵小文庫』	名称寺本	『銅駝御殿御文台』
鏡板	長 一尺九寸三分 横 一尺一寸 厚 四分五厘	長 一尺七寸五分 (52.15 cm) 横 一尺五分 (31.5 cm) 厚 三分(9mm)	長 一尺五分 横 一尺八寸五分 厚 二分五厘	長 53 cm 横 31.8 cm 厚 1 cm	長 一尺七寸二分 幅 一尺五分 厚 二寸七分
板足	高 三寸五分 横 一尺六分 厚 四分五厘	高 三寸五厘 (10.5 cm) 元禄二仲春	高 三寸五分 横 厚 元禄四	高 9 cm 元禄二仲春	厚 三分二厘 元禄二仲春

表の比較をすると、名称寺伝来の文台は曾良伝来の文台の大きさとほとんど変わらぬサイズであることがわかるが、両者の関係を裏付けるものは見当たらなかった。参考まで、後程出てくる『銅駝御殿御文台及御改正正風蕉門俳諧諸式執筆録』に記載された古式二見形文台の大きさを記載しておいた。

(6) インターネットで紹介されている二見形文台

では、現存する二見形文台にはどのようなものがあるのだろうか。インターネット上で紹介されている二見形文台をまとめてみる。(注6) その結果、現存する二見形文台は次の通りである。

- ア.出光美術館所蔵(史邦伝来のもの)
- イ.高山市郷土館所蔵(伊賀上野藤堂家の老臣安藤甚左衛門より譲り受けたもの)
- ウ.風間史料会所蔵
- エ.石川県立美術館所蔵(千代尼賛、越安居士画)
- オ.群馬県立文書館所蔵(芭蕉の使用した文台と説明)
- カ.象潟郷土資料館展示(佐々木啓喜氏所蔵)
- キ.奥の細道むすびの地記念館所蔵
- ク.ブログ掲載(個人蔵)
- ケ.『美術商の百年：東京美術倶楽部百年史』掲載資料(雪中庵伝来)

(7) 名称寺所蔵「二見形文台」の伝来

ところで、名称寺にある二見形文台の箱裏に記載されているものによれば、文台は一時期、知十や燕子の手元にあったため、その伝来において手がかりになるものがないかと2人に関しても調査を進めることにした。

岡野知十と市村燕子

岡野知十については『俳文学大辞典』（小室善弘著）によれば、

俳人。万延元（一八六〇）・二・一九～昭和七（一九三二）・八・一三、七三歳。蝦夷地(北海道)日高生れ。本名、敬胤。通称、正之助。別号、正味。明治二八年（一八九五）、毎日新聞に「俳諧風聞記」を、『女学雑誌』に「俳諧又聞記」を連載し、注目された。秋声会に加わったが、のち離脱して雀会を興し、明治三四年八月、『半面』を創刊。日本派・秋声会に対して「新々派」と称し、主観的耽美的な句で俳句革新をめざした。史的研究・古俳書蒐集にも努め、集書は東大総合図書館に知十文庫として収蔵された。晩年には小唄の創作もある。『新江戸』を主宰。句集『鶯日』(昭8)、著作『晋其角』(明33)『俳諧風聞記』(明35)、小唄集『味余』(昭9)ほか。

とある。

一方、知十より文台を譲られた門弟市村燕子についての詳細はわかっていない。しかしながら、俳誌『新江戸』（明治44年～明治45年通巻14号）を東京の日暮里村で創刊したり、燕子は編集発行人として『川柳獅子頭』（明治43年刊）に「不味侯の茶事」に関する記事を書いている。同文には「茶道有縁の我」や「知十師が例の里子亭より得られし「茶法聞書」なる一寫本あり、・・・その記事は不味侯所傳の茶法を記せしものなり」と記され、燕子は茶道に関わりがあり、師の知十から茶法に関する本の情報をもらっていたことがわかる。

さらに、中谷徳太郎（1886～1920）は明治43年から大正8年の間、主として小説・随筆・評論・戯曲・小唄などを書いた作家であるが、彼の「根岸の一夜」（大正7年2月『新日本』八ノ二初出、『三人の女に』小田原書房、大正10年6月刊に所収）という小説に知十との出会いや燕子のことが記されている。

すなわち、生粋の東京下町の出身の中谷が知十との知遇を得たという。知十の息子の馨は仏文学の翻訳家で、大正初期の「蛇の舌」の中心メンバーであり、その小さな雑誌への寄稿が縁で、中谷は知十を知り、先生と呼ぶようになり、社中の俳席や句会に列座するようになる。知十の門下には通人や藝人が多く、皆威勢のいい江戸っ子で、燕子は代表的な弟子のようだと記している。

さういふ連中のうちで代表的な燕子、『新江戸』といふ一風を開いた燕子、噂にばかり聞いてゐる燕子に、どういふものかわたしはまだ一度も逢ふ機会を持たなかった。その燕子に初めて逢ったのは、冬木の辨天堂で待宵の句會が催された夜であった。

『皆さんどうもお待たせいたしました。』

藝者かと思はれるやうな仇っぽい女聲が、外の眞暗な雨のなかゝら聞こえたと思ふと、眞白な齒を見せて微笑みながら燕子が入ってきた。噂に聞いてゐたとほり燕子は綺麗な男であつた女にしても見たいやうな仇っぽい笑聲。張りのある涼しい眼、——かういふ男が今の世の中にあるかと驚いたほど、彼の美しさは時代といふものを超越してゐた。これはおまけはない。美男子といふ詞は彼が女であるか、もしくはわたしが女であつた場合を想像してみた。そして鶯供養といふやうなこともこの男によつてはじめて厭味でなくなるのだなぞと考えた。

また、大正6年1月9日に燕子の家で催された句会に参加した中谷の文章の中に、燕子が句の披露をする際、

「君、文題を貸さうか。」と、龍耳がその無造作な様子を見て、脇床に置いてある机を顧みながら云った。

「いや、文題はいらない。」

そう答へて、燕子が窮屈さうに立膝をして互選紙を見てみると、不意に電燈が消えてしまつた。家の中は眞暗になった。

という箇所があった。この「文題」（文台が正しい）が知十から譲られたものとは限らないが、この時、すでに名称寺に文台は伝わっていた。

ところで、知十の俳句をまとめた『鶯日』（岡野馨編、昭和8年刊、私家版）によれば、燕子に関わる記事（19箇所）は次の通りである。

- ① 燕子居の爐頭にて
年立や羊遊齋の蒔繪より
- ② 大正辛酉彌生、雁々子のもとめに（初代宇治、五代一中、初代菅野像三幅對箱書のうらに）
三又にわかれし春の流哉
- ③ 大正十年如月盡、雁々子のもとめに應じて（都羽二重拍子扇の帙うらに）
羽二重の京のはなしや春の雨
- ④ 大正辛酉三月為雁々子（永與筆初祖一中畫像匣書）
古き曲の音色もするや春の雨
- ⑤ 燕子と向島にて
梅の戸は舊正月の三日かな
- ⑥ 贈文墓 寶水子（その文墓のうらに）
こぼれてもめでたきものよ松の花
- ⑦ 無精は疎白、修竹は燕子と相號するとあるに申遣る
衣かへ田中根岸の寮住居
- ⑧ 露伴博士の長女十三になりしが猩紅熱にてうせたるよし燕子くやみにゆくとて来る。春江をとられしいたみの今に胸をさらぬからに涙ぐまれるなり。今日は舊の四月八日なりと。
葉玉のなと力なき花環とは
- ⑨ ほととぎすの句を燕子と讀む
ほととぎす二階へそつとかくれけり
- ⑩ 妻児夏を湘南に消し同人多くは亦都門を出で去る、星影簾に落ちて坐ろに懷しむ、偶々颯々来る、燕子と相促して共に韻を探る
秋立つや窓の格子の觀世水
- ⑪ 大正十年十月十五日市村雁々死去す。十七日朝火葬。凌雲院燕子日通信士
俳名を戒名に秋の名残かな
我と我が手を握りしむ悲秋哉
秋紛らす人よ旨くもない酒に
- ⑫ 琵琶箱を文墓にせむ今日の月
- ⑬ 三十一日。自宅の水騒ぎに赴く燕子に
秋の燕飛ぶ如くなり甲斐々々し
- ⑭ 燕子 謹贈
絲の願ひあまりに女らしからむ
- ⑮ 上根岸に卜居す、燕子秀雨亦こゝに住む
簑の櫓つばくらの櫓菊の櫓
- ⑯ 燕子君が雁々と改むるを壽きて
としの内に春やむかしの男まへ
- ⑰ 故雁々居にて（二首）
灰となる爐中の炭のあと淋し

妻が手につぎ足す炭の香が淋し

- ⑱ この幅のもと誰が肩にぞ（註。この幅とは燕子居が鶯蒲の幅のことなり）

屠龍忌やその墨あとの羽織裏

- ⑲ 文化文政をねらって風俗畫に出色の筆を見せられるのは清方氏である。今夏烏合會出品の抱一像は左右傾城と禿をかゝれ、三味線をとりあはされたのがよき風情である。此畫、賣約になつたのを、氏はその背景の花籠の花が気に入らぬとて書き直されるとのこと。心ざしまで文化文政そのあたりの古名匠のゆき方である。尚さら有難い事に思はれる。

替紋を何度も菱に崩し替へ

文台の睦し月の遊び哉

⑲より燕子は「雁々」という俳号に改めている。その年がいつのことかはわからない。しかし、中谷氏の『三人の女に』の中で大正6年1月9日に燕子の家で催された句会に参加したことを記述しているが、そのときには「燕子」と書いている。さらに、②③④では大正10年には「雁々子」とある。⑪より燕子は大正10年10月15日に亡くなったことがわかる。燕子は晩年である大正6年以後、俳号を「雁々」と改めたようである。それまで師の知十には②③④などより、家蔵品の箱書きなどを求めている。また、⑬よりおそらくは大正6年9月30日の大型台風で東京を直撃、各河川沿いは床上浸水した。その時、燕子が知十の家にすぐさま心配して行ったことがわかる。

名称寺に伝わる二見文台を知十が燕子に譲った時の句は同書からは見出せなかった。しかしながら、⑥のように寶水へ贈った文台の裏書きに記された俳句はある。

これに関して、岡本勝氏は『俳文学の森で』（北溟社、平成15年刊）所収「岡野知十の文台」で、

近世、俳人が独り立ちの宗匠となる時、立机と称して師から文台が譲られた。知十が寶水へと文台を譲ったのも、それを意識したものであろう。

とある。この寶水に宛てた知十の文台は三重県三重郡朝日町に中村古松の主宰する『松の栞』という俳誌があるが、その中村氏に譲られ、彼の遺族が朝日町教育文化施設に寄贈された資料の中に現在はある。

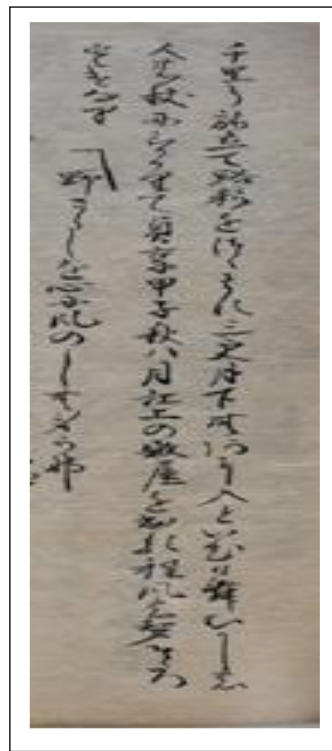
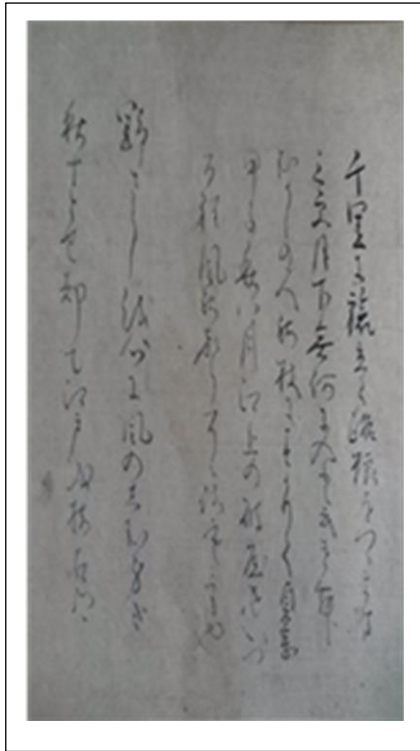
このように二見形文台は曾良伝来、史邦伝来、支考が参考にしたもの、祇徳が所持したもの、名称寺が所持したもので5種類、さらにインターネット検索により数点の文台が現存している。結論として、名称寺所蔵の文台は芭蕉の自筆の物とはいいいがたいと考える。

4. 『芭蕉行脚乞食袋』

次に『芭蕉行脚乞食袋』について考察する。

（1）芭蕉自筆のものか

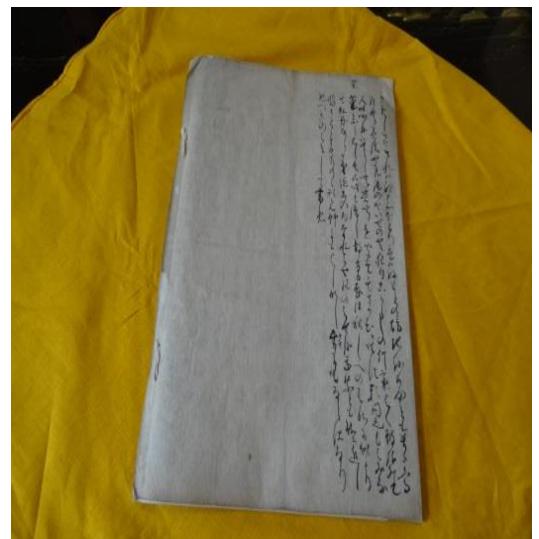
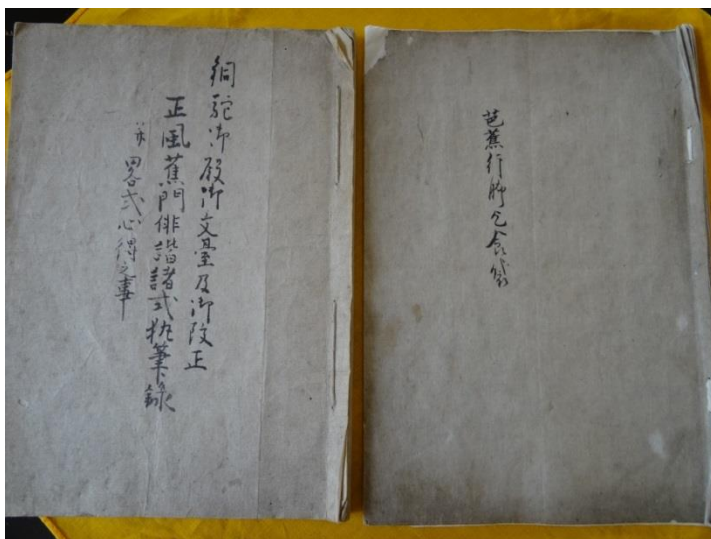
『芭蕉行脚乞食袋』は果たして芭蕉自筆のものなのか、どうかについては、『芭蕉真蹟』に掲載されている芭蕉自筆自画である『甲子吟行画卷』の冒頭文と『芭蕉行脚乞食袋』のそれを比較すると、一目瞭然にして同一人物の筆でないと思われる。

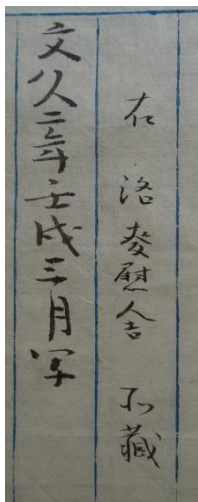


左側は芭蕉自筆自画「甲子吟行画卷」で『芭蕉真蹟』に掲載。右側は『芭蕉行脚乞食袋』に掲載。

(2) 書写された年代

また、名称寺で『芭蕉行脚乞食袋』を調査した時に二条家ゆかりの沢山の俳書を同時に見せて頂き、その中で『銅駝御殿御文台及御改正 正風蕉門俳諧諸式執筆録 并略式心得之事』（以下、『銅駝御殿』と称す）を『芭蕉行脚乞食袋』の横に並べてみると（写真左）、紙質などから同じような時期に完成した写本であると推測できた。ただし、『芭蕉行脚乞食袋』の裏表紙はなく（写真右）、綴じ紐は当時のものではなく、一度新たなものに換えられた痕跡があった。

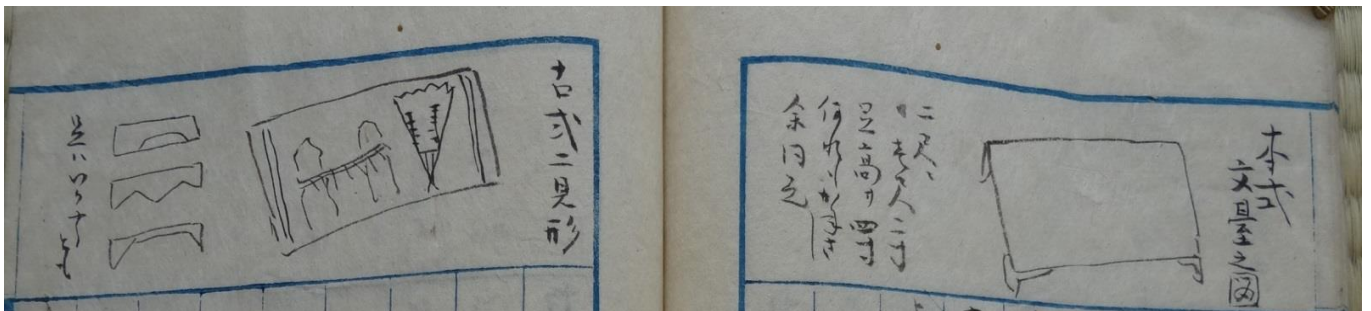




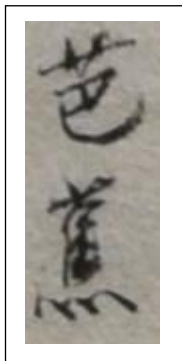
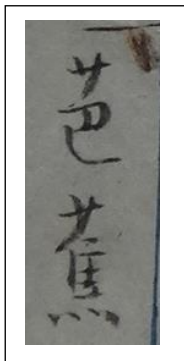
ところで、『銅駝御殿』は左の写真のように、巻末に「右 洛 麦慰舎 所蔵 文久二年 壬戌三月写」とある。そのため、「麦慰舎」すなわち二条家俳諧の宗匠を務めた堤梅通が文久2年3月15日に二条家俳諧を行っており、その開催に際して写された書であるとして富田志津子氏のご研究により明らかである。そして文字も梅通のものと考えられている。(注7)

(3) 『銅駝御殿御文臺及御改正 正風蕉門俳諧諸式執筆録 并畧式心得之事』

さて、『銅駝御殿』の文中に記された文台(下記の写真)は蕉門における古式にのっとった二見形文台の形状や使い方を記した記述であり、二条家から移譲された文台も同じ形式のものではあるが、それがそのまま芭蕉ゆかりのものかどうかについては明らかではない。



(4) 筆跡比較



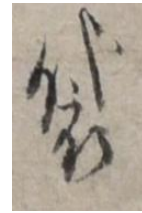
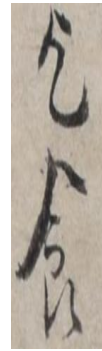
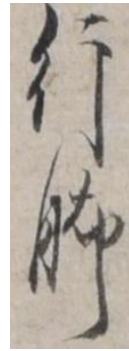
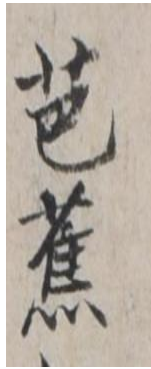
筆跡に関しては『芭蕉行脚乞食袋』本文(写真右)と『銅駝御殿』の「芭蕉」(写真左)の二文字を抽出しても写者が異なることは明らかである。

なお、『銅駝御殿』の翻刻をされた富田氏に連絡を取り、資料閲覧時のことを尋ねたところ、日野氏から芭蕉の真蹟関係資料を見てもらいたいとのことで、石川真弘氏と同行。その際、二見形文台と『芭蕉行脚乞食袋』を閲覧。前者については絵のない文台とのこと、お寺にはもう一つ文台を所持されているのか。この件に関して、日野氏からの電話により、10年前も現在も絵や文字のない二見形文台はない、その後、筆者の研究発表の会場では絵はあったかもしれないとお応えが返ってきた。後者に関しては、石川氏が江戸時代後期の写本だと言っておられ、筆者も『銅駝御殿』を書写した文久9年、すなわち江戸後期のものではないかと推測しているという報告の手紙を日野氏宛に出したが、筆跡には年代ごとにさまざまに変化するため、賛同する意見は伺えなかった次第である。

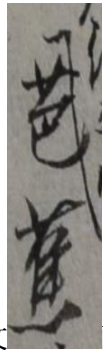
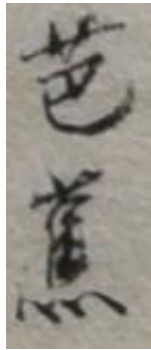
(5) 『芭蕉行脚乞食袋』の表紙の文字と本文の文字を比較

また、『芭蕉行脚乞食袋』の表紙の文字と本文の文字を比較してみると次のようになる。

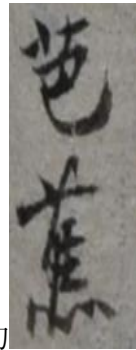
次頁の上段は『芭蕉行脚乞食袋』の表紙の文字、下段は本文(酬和の句、素堂の跋を含む)の文字である。写本の表紙と本文が同一人物によるものかどうか、「行」「乞食」「袋」などを比較する限りでは判断しがたいとも感じたが、研究発表の折、同一筆跡の範囲内ではないかという見解を研究者数名からにも意見を伺うことができた。



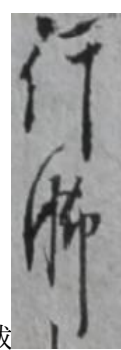
表紙



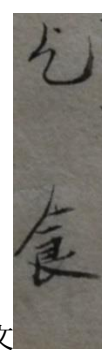
本文



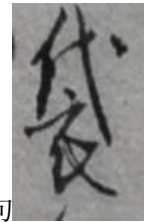
酬和の句



素堂の跋



本文



本文

(6) 二条家俳諧系図

『銅駝御殿』は二条家の俳諧開催に際して、宗匠の梅通が二条家の俳諧作法の改正(5年ぶりの開催)のために書写されたものであり、同時期に蕉風復興を象徴するかのよう『芭蕉行脚乞食袋』が書写されるのは想定内のことであろう。

いわゆる「二条家俳諧とは京の二条邸に俳人が召され、俳諧を興行するものであり、芭蕉100回忌を3年後に控えた寛政2年に尾張の暁台により創始した。芭蕉100回忌に際しては芭蕉に「正風宗師」を追号し、義仲寺と芭蕉堂に扁額等を下賜したのが二条家であった。芭蕉顕彰、蕉門中興が、常に二条家の俳諧の主たる精神であり、その目的は近代に至っても最後まで見失うことはなかったと言われている。それゆえ、二条家は芭蕉真蹟類はいうまでもなく、芭蕉関係のさまざまな資料を持っていたとの推測はできる。二条家俳諧の宗匠は暁台、闌更に、青蘿の三宗匠から始まり、ほとんどが京在住の俳人であり、江戸後期の三大家とされる蒼虬、梅室、鳳朗へと引き継がれた。その多くは闌更の門流であり、その中でも何丸は江戸の人で芭蕉研究家として有名でもあった。

江戸後期には二条家に伝わる芭蕉真蹟類を前にして、書写することができたであろうし、また、『野ざらし紀行』の写本、版本類など様々なものを手元に置いて、書写することも可能であったかもしれない。『芭蕉行脚乞食袋』自身が芭蕉の真筆でなくとも、その写本の原本が大変気になるところである。

二条家に伝わる芭蕉真蹟類、その中に芭蕉自筆の『野ざらし紀行』が含まれているのかどうか、また、『芭蕉行脚乞食袋』の写者は二条家に関わるものなのかどうか、大変興味深いものがある。現時点では日野氏に見せて頂いた数々の二条家ゆかりの資料には『芭蕉行脚乞食袋』と同じ筆跡のものは見当たらなかった。

(7) 題名比較

では、次に名称本では本の題目が『芭蕉行脚乞食袋』となっているが、他の『野ざらし紀行』の諸本ではどうなっているのかについて表にまとめた。

西暦	和 暦	諸本名	所蔵・作品名	題	備 考 「」内は本文からの引用
1685	貞享2年か?	天理本	天理図書館所蔵	野さらし(箱に芭蕉自筆)	
1686	貞享3年か?	孤屋本	専宗寺所蔵 孤屋・許六・林篁転写	野さらし乃紀行(表紙)	貞享3年説(山崎喜好氏)元禄11年説(井上敏幸氏・濱森太郎氏)延享3年説(小林孔氏)(注8)
1686	貞享3,4年か?	御雲本	御雲文庫所蔵	甲子吟行 芭蕉自画(絵巻の表題簽)、芭蕉翁甲子吟行(添付書類)	
1687	貞享4年秋	三康本	三康図書館所蔵	芭蕉翁甲子吟行(箱蓋表)、芭蕉翁野佐らし紀行(箱蓋裏)	
1709	宝永6年成	土芳本	土芳稿・雪芝転写『蕉翁文集』柿衛文庫所蔵	道の記	
1715	正徳5年刊		許六著『歴代滑稽伝』文中	(草枕・野さらしの紀行)	「其ころ故郷伊賀に立帰ける道の紀を草枕共野さらしの紀行共いふ」
1747	延享4年成		林篁編『砂川』(専宗寺旧蔵本)	野さらしの紀行	「泊船集奥のほそミち野さらしの紀行也」
1756	元禄7年刊		其角編『句兄弟』文中	(芭蕉翁甲子の記行)	「熱田奉幣 芭蕉翁甲子の記行には社大イニ破れ」
1761	元禄11年刊	泊船本	風国編『泊船集』	芭蕉翁道乃紀(文頭)	
1761	元禄11年刊		許六編『俳諧問答』文中	(のざらしの集)	「しかし風国か文章にのざらしの集などいへる事あれば見ざるともいひかたし」
1761	元禄11年刊		許六編『俳諧問答』文中	(草枕)	「予はせを庵にて借用の草枕に慥にのゝ字入たり」
1761	宝暦11年刊	初懷本	菊舎主人編『丙寅初懷紙』	野さらしの紀行	
1761	宝暦11年成	桃鏡本	桃鏡編『芭蕉翁文集』早稲田大学図書館所蔵	甲子吟行	
1762	宝暦12年成	潜居本	旧大阪女子大学図書館所蔵	芭蕉甲子吟行	
1768	明和5年刊	月下本	月下編『野さらし紀行』	野さらし紀行	本紀行最初の単行本

1775	安永4年刊	蘭更本	蘭更編『俳諧蓬萊島』	野晒紀行	芭蕉の句文集
1776	安永5年刊	蝶夢本	蝶夢編『芭蕉翁文集』	甲子吟行	
1776	安永5年成	蕪村本	個人蔵	野さらしの記行	蕪村自筆絵巻物
1780	安永9年刊	波静本	波静編『甲子吟行』	甲子吟行	本紀行二番目の単行本
1802	享和2年刊	拾遺本	其成編『七部拾遺』	野さらし紀行	
1824	文政7年刊	四部本	『芭蕉翁俳諧四部録』	野さらし紀行	
1827	文政10年刊	一葉本	仏兮等編『俳諧一葉集』	甲子紀行 又称野曝紀行	最初の芭蕉全集
1852	嘉永5年刊	袖珍本	黙池編『俳諧袖珍抄』	甲子紀行 又称野曝紀行	
		名称 寺本	名称寺蔵	芭蕉行脚乞食袋（表紙）	

現在、一般的に呼称されている『野ざらし紀行』は江戸から旅立った年の干支から『甲子吟行』と言われている。芭蕉の直弟子である土芳が著した『蕉翁文集』では「道の記」と名付けられ、『泊船集』に踏襲されたようである。また、芭蕉より絵の師と仰がれた許六の記した文章には「草枕」とある。ただし、名称寺本の『芭蕉行脚乞食袋』という呼称は同本のみに見られるものである。

ところで、「乞食」という言葉から思い出されるのは天和元年冬の作とされている次の芭蕉真蹟懷紙「乞食の翁」の存在であろう。（傍線筆者）

窓含西嶺千秋雪
門泊東海萬里船

泊船堂主 華桃青□

我其句を職て、其心ヲ見ず。その侘をはかりて、其樂をしらず。唯、老杜にまされる物は、獨多病のみ。
閑素茅舎の芭蕉にかくれて、自乞食の翁とよぶ。

櫓聲波を打てはらわた氷る夜や涙
（略）

芭蕉が深川に居を移して、芭蕉を植えた天和元年ごろ、市中を対岸にした深川の貧寒な生活に杜甫の侘びを慕う心境を漢詩が表されていると言われている（注9）。この時、杜甫の漢詩に「泊船」という語句が見られ、芭蕉も庵の名を「泊船堂」とし、自らを「乞食の翁」と称している。名称寺本の題名は芭蕉自筆関係や直系の弟子関係の写本類に同じものが見られないため、書写するに際して、貞享元年に旅立った芭蕉の心境や紀行に内容を加味して、名付けたものかと思われる。

（8）本文研究

a. 諸本の系統序列を判別するための7つのポイント（弥吉菅一氏の『芭蕉「野ざらし紀行」の研究』参考）

では、次に『芭蕉行脚乞食袋』の本文の原典は何に基づくのかについて考察する。『野ざらし紀行』の諸本の系統序列に関しては弥吉菅一氏の従来説に対して、濱森太郎氏説の2説が対立関係にある。本稿においては、ひとまず弥吉氏の『芭蕉「野ざらし紀行」の研究』（桜楓社、昭和62年刊）の書に従うことにする。

『野ざらし紀行』の諸本の系統序列を判別するために、7つポイントを掲げてみる。

- ① 大井川の条では「道のべの木槿は馬にくはれけり」の句の前書が「眼前」となった場合は、泊船本系であり、「馬上吟」の前書は三康本系である。名称寺本は「眼前」のため、泊船本系となる。
- ② 伊勢の条では「みそか月なし千とせの杉を抱あらし」の句を中心に前文と後文が二分されるのが泊船本系

である。また、三康本系では、後文が前文の間に入る形となり、最後に「みそか月なし」の句で終わっている。名称寺本は泊船本系となる。

- ③ 竹の内の条では「わた弓や琵琶になぐさむ竹の奥」の前書である「藪より奥に家有」の有無が本文の推敲過程を示す大きな鍵になっている。名称寺本では前書があり、泊船本系といえる。

① 大井川の条	② 伊勢の条	③ 竹の内の条	④ 春なれやの条
天 眼前	天 前文一句—後文	天 やふよりおくに家有	天 朝かすみ
泊 眼前	泊 前文一句—後文	泊 藪よりおくに家有	泊 朝霞
孤 眼前	孤 前文(後文)—句	孤 藪より奥に家有	孤 朝霞
三 馬上吟	三 前文(後文)—句	三 ×	三 薄霞
初 馬上の吟	初 前文(後文)—句	初 ×	初 うす霞
一 馬上の吟	一 前文(後文)—句	一 藪より奥に家有	一 朝かすみ
名 眼前	名 前文一句—後文	名 藪より奥に家あり	名 朝霞

(注 10)

- ④ 春なれやの条では、「春なれや名もなき山の朝霞」の形態が泊船本系となり、下五が「薄霞」になっているのは三康本系。名称寺本は下五が「朝霞」のため、泊船本系といえる。
- ⑤ 石部の条では、次の句文の有無で泊船本系と三康本系と二分される。名称寺本には存在するため、泊船本系となる。

昼の休らひとて旅店に腰をかけて
つゝしいけて其陰に干鱈さく女
吟行
菜畠に花見兒なる雀哉

- ⑥ 大顛和尚の条では「梅こひて卯の花拝むなみたかな」の前書

此の僧我に告げて日圓覚寺の大顛和尚こしむ月の初遷化したまふよしまことや夢の心地せらるゝ
に先道より其角か方へ申遣しける

において、傍線部分が「われに～方へ」であれば泊船本系、「予に～許へ」は三康本系の形態をとる。名称寺本は「我～方へ」のため泊船本系となる。

- ⑦ 甲斐の条では、「行く駒の麦になぐさむやとりかな」の前書が「甲斐の国山家に立ち寄りて」であるが、泊船本系では傍線部が「山家」となり、三康本系では「山中」となっている。名称寺本は「山家」であり、泊船本系。

⑤石部の条	⑥大顛和尚の条	⑦甲斐の条
天 ×	天 我に・・・方へ	天 山家
泊 晝の休らひ・・・雀哉	泊 われに・・・方へ	泊 山家
孤 昼の休らひ・・・雀かな	孤 我に・・・方へ	孤 山家
三 ×	三 予に・・・許へ	三 山中
初 ×	初 予に・・・もとへ	初 ×
一 昼のやすらひ・・・すゝめかな	一 我に・・・方へ	一 山中
名 昼の休らひ・・・雀かな	名 我に・・・方へ	名 山家

以上、7つのポイントを整理すると

- ① 大井川の条・・・泊船本系

- ② 伊勢の条・・・泊船本系
- ③ 竹の内の条・・・泊船本系
- ④ 春なれやの条・・・泊船本系
- ⑤ 石部の条・・・泊船本系
- ⑥ 大顛和尚の条・・・泊船本系
- ⑦ 甲斐の条・・・泊船本系

のようになり、名称寺本は明らかに泊船本系の諸本ということになる。

b.付属品（「酬和の句」「素堂の序跋」「絵画」「奥書」）

続いて、『野ざらし紀行』の諸本の系統序列を判別するために、本紀行文に付属しているものに注目してみる。それは、「酬和の句」「素堂の序跋」「絵画」「奥書」などである。一般的に考えられるのは紀行本文が完成し、作品としての体裁を考えたときに、序文・跋文、奥書を後日、付す。また、文章だけでは表現できていない部分には絵画を付すことで補う。もしくは、絵巻物にするために絵を描き、句文を記していく作業をする。それらの順番についてはここでは考察せずに、まずは執筆年代順(弥吉氏説)に掲げると下表のようになる。

この表を見る限り、「酬和の句」「素堂の跋文」を持つ泊船本・孤屋本と「素堂の序文」「絵画」を持つ御雲本・三康本の二つの系統が明らかになってくる。名称寺本は「酬和の句」「素堂の跋文」を持っているため、泊船本系のものであることは想像できる。そして、次のような疑問点が生じてくる。

- * 泊船本を見ながら転写したのかと仮定すると、酬和の句や素堂の跋文は孤屋本を参考にしたのか。
- * 泊船本の原典には酬和の句や素堂の跋文があり、それを転写したのか。
- * 孤屋本を転写したのか。
- * 孤屋本と泊船本、両本を転写したのか。

諸本名	酬和の句	素堂の文	絵	奥書
天理本	○	×	×	×
泊船本	△	△(跋)	×	×
孤屋本	○	○(跋)	×	×
御雲本	×	○(序)	○(自画)	×
三康本	×	○(跋)	○(濁子)	○
名称寺本	○	○(跋)	×	×

備考：○記号は該当のものが付いていたことを示す。

×記号は該当するものが付いていないことを示す。

△記号は原典にはあったが、刊行時に省略したという記事のある意を示す。

名称寺本は本文の7つのポイントからも泊船本系であり、付属品からも同様なことが言える。そこで、泊船本と名称寺本の比較をする必要があるかと思えるが、付属品である「酬和の句」と「素堂の跋文」は泊船本で確かめることはできかねる。それは泊船本の最後の

後へに處々酬和の句

素堂の跋あり今

畧之

という表記により窺がえる。そのため、本文比較は付属品のみ、孤屋本とするほかはないということが理解できる。

仮説を2つたててみる。

1. 名称寺本は泊船本原典、もしくは泊船本と他本を見て写したものではないか（泊船本には付属品がないため、泊船本原典の可能性が高い）
2. 名称寺本は孤屋本原典、もしくは孤屋本と他本を見て写したものではないか

2つ目の名称寺本が孤屋本との関わりの深い本であるならば、『野ざらし紀行』の諸本研究上、大変価値のあるものということになる。

c. 名称寺本と4つの諸本の本文比較

そこで、名称寺本と泊船本、孤屋本の本文比較をすることにした。ただし、『野ざらし紀行』の付属品である酬和の句や素堂の跋文を有している芭蕉自筆の初稿本（天理本）や御雲本の存在があるため、比較表に入れることにした。色付けされたところに共通する箇所、および、その割合を数値化した。さらに、2つ目の表は天理本、泊船本、孤屋本、御雲本は同表記であるが、名称寺本のみ異なる表記である箇所を表に掲げたものである。

番号	諸本名					共通箇所	割合 (%)
1	天理本	泊船本	孤屋本	御雲本	名称寺本	233	28.6
2	天理本	泊船本	孤屋本	御雲本	名称寺本	216	26.5
3	天理本	泊船本	孤屋本	御雲本	名称寺本	57	7
4	天理本	泊船本	孤屋本	御雲本	名称寺本	57	7
5	天理本	泊船本	孤屋本	御雲本	名称寺本	52	6.4
6	天理本	泊船本	孤屋本	御雲本	名称寺本	47	5.8
7	天理本	泊船本	孤屋本	御雲本	名称寺本	41	5
8	天理本	泊船本	孤屋本	御雲本	名称寺本	23	2.8
9	天理本	泊船本	孤屋本	御雲本	名称寺本	14	1.7
10	天理本	泊船本	孤屋本	御雲本	名称寺本	14	1.7
11	天理本	泊船本	孤屋本	御雲本	名称寺本	13	1.6
12	天理本	泊船本	孤屋本	御雲本	名称寺本	11	1.3
13	天理本	泊船本	孤屋本	御雲本	名称寺本	11	1.3
14	天理本	泊船本	孤屋本	御雲本	名称寺本	10	1.2
15	天理本	泊船本	孤屋本	御雲本	名称寺本	8	1
16	天理本	泊船本	孤屋本	御雲本	名称寺本	7	0.9
17	天理本	泊船本	孤屋本	御雲本	名称寺本	1	0.01
	398(49%)	646 (79%)	623 (76%)	571 (70%)		815	99.81

本文比較（名称寺本のみ異なる所）						
番号	条名	天理本	泊船本	孤屋本	御雲本	名称寺本
1	江戸	破屋を	破屋を	破屋を	破屋を	敗屋を
2	箱根	関	関	関	関	関を

3		たひ	たひ	旅	たひ	度
4		莫逆の交	莫逆の交	莫逆の交	莫逆の交	莫逆の交り
5	富士川	川の	川の	河の	川の	川ハ
6		かけて	かけて	かけて	かけて	懸て
7		露はかりの	露はかりの	露はかりの	露計の	露斗の
8		秋の風	秋の風	秋の風	秋の風	秋×風
9		とをるに	とをるに	とをるに	とをるに	通ルに
10		ゝくまれたるか	にくまれたるか	にくまれたるか	悪まれたるか	にくまれたるにや
11		たゝ	唯	唯	唯	×
12		是	是	是	これ	只
13		なけ	なけ	なけ	なけ	泣ケ
14	大井川	大井かハ	大井川	大井川	大井川	大井川を
15		日は	日は	日は	日は	×に
16	小夜の中山	かすかに	かすかに	かすかに	かすかに	幽に
17		驚く	驚く	驚く	驚く	驚ク
18	伊勢	一の	一の	一の	一ノ	一×
19		處々に	處々に	處々に	處々に	所々に
20		を	を	を	を	に
21		ちり有	塵あり	塵有	塵有	×
22		そくに	俗に	俗に	俗に	×
23		ゝて	似て	似て	ゝて	×
24		我	我	我	我	吾
25		あらずと	あらずと	あらずと	あらずと	非すと
26	西行谷	云て	云て	云て	云て	×て
27		閑人の	閑人の	閑人の	閑人の	閑人×
28	故郷	有てと	有てと	有てと	有てと	有×と
29		のみ云て	のミ云て	のミ云て	のみ云て	のみ言て
30		子の	子か	子か	子か	××
31		たまてはこ	玉手箱	玉手箱	玉手箱	御玉手箱
32	当麻寺	千とせも	千とせも	千とせも	千とせも	千年も
33		大イサ	大いさ	大イサ	大イサ	大×サ
34	吉野	よし野の	よし野の	よし野ゝ	よし野ゝ	芳野の
35		山賤の	山賤の	山賤の	山賤の	山かつの
36		やまに	山に	山に	山に	山×
37		ある	ある	ある	ある	有
38	西行庵	わけ	わけ	わけ	わけ	分
39	御醍醐帝	下るに	下るに	下るに	下るに	下ルに
40	大和	いにしへ	いにしへ	いにしへ	いにしへ	古

41	不破	秋風や	秋風や	秋風や	秋風や	秋風や
42	熱田	詣つ	詣ツ	詣	詣	詣て
43		破れ	破れ	破れ	破れ	破レ
44	名古屋	いぬも	犬も	犬も	犬も	犬×
45		みに	見に	見に	見に	×に
46		市人よ	市人よ	市人よ	市人よ	市人に
47		なかむる雪 の	なかむる雪 の	なかむる雪 の	なかむる雪 の	むかむる宵の
48	故郷	笠きて	笠きて	笠きて	笠きて	笠着て
49		越て	越て	越て	越て	越けらし
50	奈良	ならに	奈良に	奈良に	奈良に	奈良×
51		道	道	道	道	×
52	大津	すみれ草	すみれ草	すみれ草	すみれ草	堇中
53		花より	花より	花より	花より	はなより
54	大巖和尚	秋より	秋より	秋より	秋より	秋より
55		くにまて	国まて	国まて	国まて	国迄
56	桐葉亭	いまや	今や	今や	今や	今もや
57	江戸	卯月の末	卯月の末	卯月の末	卯月の末	卯月のすへ

『野ざらし紀行』の諸本の5つの諸本を比較すると、28頁の17種類に整理することができた。

1つは5つの諸本に共通箇所が233あり、全体の29%であった。

2つは天理本以外の4本の共通箇所が216あり、全体の27%であった。

3つ目以降は表の数字の通りであった。

これらより何が言えるのか。『野ざらし紀行』の本文を815箇所に分けて、比較表を作成した。すると、5つの諸本の共通点は29%になった。すなわち、芭蕉自身が記した天理本や御雲本の表記がそのまま3つの写本に伝えられているということである。また、名称寺本と4つの諸本と共通している箇所を拾い上げてみると、

天理本(398箇所、49%) 泊船本(641箇所、79%) 孤屋本(623箇所、76%) 御雲本(571箇所、70%) となった。これらより、名称寺本が80%近くは泊船本や孤屋本と同表記を使用しており、70%近くは芭蕉自筆本とも同じ表記を持った写本であるといえることができる。

では、逆に名称寺本のみしか見られない表記を掲げてみると、57箇所ある。そのうち、表中のゴシック体の31か所は明らかに誤写と思われるものである。

d. 孤屋本からの踏襲

次に、『野ざらし紀行』の付属品である酬和の句や素堂の跋文をも収めている孤屋本に注目してみることにした。

濱森太郎氏の『松尾芭蕉作「野ざらし紀行」の成立—文字データベースによる用字解析—』(三重大学出版会、平成21年刊)によると、孤屋本の独自の表現・表記を(誤写・誤脱)、(漢字表記)、(仮名表記)の3つに分けて表にまとめている。それに基づいて、名称寺本の表記、および参考までに泊船本の表記をも付した表を次頁に掲げる。

この表より、6・12・14・17・20・23・27・28は濱氏によれば「ケアレス・ミスを思わせる助詞の誤写・誤

脱」とされている。名称寺本では24・27・29以外は孤屋本を踏襲してはいない。さらに、2・3・10・13・21・30に関して、濱氏は「漢字の誤写からも、やや軽率な書写態度が窺われる。」とし、名称寺本は踏襲されていない。

孤屋本の筆者が「む」を「ん」、「え」を「へ」と書く書き癖の持ち主だったことが窺われるものとして、濱氏は、1・4・5・8・19を掲げているが、名称寺本はその限りではない。

孤屋本の誤写・誤読			
	泊船本	孤屋本	名称寺本
1	いひけむ	いひけん	いひけむ
2	秋八月	秋は月	秋八月
3	此たひ	此旅	此度
4	たえす	たへす	たえす
5	捨置けむ	捨置けん	捨置けむ
6	有けるを	有けるに	有けるを
7	陰ほのくらく	陰ほのくらき	陰ほのくらく
8	見えて	見へて	見えて
9	をんなともの	おんなともの	おんなともの
10	かへさある	かへさ有	かへさある
11	おかめよ	おかめと	おかめよ
12	なんちか	なんちに	汝か
13	二上山	尼上山	二上山
14	木を	木×	木を
15	かくる	かくれ	かくる
16	いはむも	いはんも	いはむ
17	有て	あり	有て
18	たふとし	たふとく	たふとし
19	見えて	見へて	見えて
20	耳を	耳も	耳を
21	秋の日	秋の月	秋の日
22	常盤の	常盤	常盤の
23	おもひて	おもひ	おもひて
24	死にもせぬ	死もせぬ	死もせぬ
25	生たる	生たり	生たる
26	たるそ	たり	たるそ
27	誰カ婿そ	誰婿そ	誰婿そ
28	伏見	伏見の	伏見
29	あふて	逢て	逢て
30	いさともに	いさ友に	いさとともに

続いて、濱氏が提示されている孤屋本独自の漢字表記に名称寺本、および、泊船本の表記を添えて掲げる。

孤屋本独自の漢字表記			
	泊船本	孤屋本	名称寺本
1	此たひ	此旅	此度
2	こよひや	今宵や	こよひやすつらん (すつらんは消す)
3	あすや	明日や	あすや
4	ちゝに	父に	父に
5	道のへの	道野部の	道のへの
6	千とせの	千年の	千とせの
7	かへさある	かへさ有	かへさある
8	あが名に	我名に	あか名に
9	たきものす	焼物す	たき物す
10	とひて	問て	問て
11	おくに	奥に	奥に
12	おく	奥	おく
13	二上山	尼上山	二上山
14	へたるならん	経たるならん	経たるならむ
15	ひかれて	引れて	ひかれて
16	おくに	奥に	奥に
17	ひゝき	響	ひゝき
18	おほくハ	多くハ	多クは
19	また	又	また
20	しのふ草	忍ふ草	しのふ艸
21	います	今須	います
22	かたへ	方に	方に
23	名のる	名乗る	名のる
24	ふしミの	伏見の	伏見の
25	つゝしいけて	躑躅いけて	躑躅いけて
26	まことや	誠や	まことや
27	二たひ	二度	二度

これより、濱氏は1・5・7・13(先の表)の5例をあげて「通常の書写とは違っている孤屋本の筆者はどうやら本文を一度、頭で意識した後、漢字に書き換えている」としている。これについても名称寺本は踏襲していない。

最後に孤屋本の独自の表現・表記の中から独自の仮名表記を掲げる。

孤屋本独自の仮名表記			
	泊船本	孤屋本	名称寺本
1	秋八月	秋は月	秋八月

2	雨降て	雨ふりて	雨降りて
3	初	はしめ	初
4	有て	あり	有て
5	既ニ	すてに	すてに
6	暮ければ	くれけれハ	暮ければ
7	出る	いつる	出る
8	辛崎の	からさきの	辛崎の
9	懸て	かけて	かけて
10	其陰に	其かけに	其かけに
11	雀哉	雀かな	雀かな

11 例中、5・9～11 に関しては名称寺本も同じ表記をとっているが、取り立てて顕著な特徴を持つものではないと判断できる。これより、孤屋本独自の表現、表記を名称寺本は踏襲していないことが明らかである。

次に酬和の句について、本文比較に入る。

酬和の句の比較				
	諸本名(共通箇所の色づけ)			該当箇所数
1	天理本	孤屋本	名称寺本	122 (52%)
2	天理本	孤屋本	名称寺本	66 (28%)
3	天理本	孤屋本	名称寺本	31 (13%)
4	天理本	孤屋本	名称寺本	12 (5%)
5	天理本	孤屋本	名称寺本	4 (2%)

酬和の句を収めている『野ざらし紀行』の諸本は天理本と孤屋本、そして名称寺本の3本のみである。それらの比較より名称寺本は天理本(65%)に比べると孤屋本(78%)に類似した本ということになる。ただし、4のように天理本と孤屋本の2本は共通しているが、名称寺本のみ異なる表記を取っている例は12例(全体の5%)。

酬和の句本文 (天理と孤屋本の共通箇所名称寺本と異なる所)			
番号	天理本	孤屋本	名称寺本
1	いせ山田	いせ山田	×
2	同	同	×
3	卯の雪	卯の雪	卯のはな
4	住持は独	住持は独	住處は独
5	こたふ	こたふ	ことふ
6	古人	古人	故人
7	こからし	こからし	木からし
8	々	々	仝
9	摘	摘	つむ
10	二町程	二町程	二町ほと
11	前垂の	前垂の	前たれの

12	しやくやく	しやくやく	しやく薬
----	-------	-------	------

具体的に表に掲げてみたが、写しミスとも思えるものが4例（1～4）ある以外は大きな異同ではない。

次に素堂の跋文の本文比較に入る。

素堂の跋文を収めている『野ざらし紀行』の諸本は孤屋本、三康本、名称寺本の3本である。比較すると孤屋本（65%）に比べて、三康本（80%）との共通箇所の方が若干多くなっていることがわかる。ただし、その数値よりも孤屋本と三康本の共通箇所、名称寺本との異同を示す数値の方が高いようである。具体的に37箇所を掲げる。37箇所の内、明らかに名称寺本自身の書写ミスとも思えるものは15箇所（表内のゴシックの箇所）ある。それ以外は大きな異同とは認められない。

素堂の跋の本文比較				
	諸本名(共通箇所に色づけ)			該当箇所数
1	孤屋本	三康本	名称寺本	149(61%)
2	孤屋本	三康本	名称寺本	37(15%)
3	孤屋本	三康本	名称寺本	30(12%)
4	孤屋本	三康本	名称寺本	22 (9%)
5	孤屋本	三康本	名称寺本	5 (2%)

素堂の跋 (孤屋本と三康本の共通点で名称寺本と異なる所)			
番号	孤屋本	三康本	名称寺本
1	山素堂	山素堂	×
2	人の	人の	人×
3	このむ物から	このむ物から	好物なから
4	たゝ	たゝ	只
5	かたり	かたり	語り
6	たつねんとて	たつねんとて	尋んとて
7	風も	風も	風の
8	哀也	哀なり	あはれなり
9	杉風	杉風	×
10	此句秋なるや	此句秋なるや	此句秋なりや
11	作者もしらす	作者もしらす	作しやもしらす
12	ふるきならん	ふるきならん	ふるきならむ
13	又	又	また
14	ゆふへ	ゆふへ	夕
15	羽織見ん	羽織見ん	羽織ミむ
16	市なさん	市なさん	市なさむ
17	帰りぬ	帰りぬ	かへりぬ
18	たま物を	たまものを	たまもの

19	仁の	仁の	×
20	聞人に	聞人に	きく人に
21	くはへて	くはへて	加へて
22	こゝに	こゝに	爰に
23	あらん	あらん	あらむ
24	ふるさとの	ふるさとの	ふる郷の
25	あれハ	あれハ	あれて
26	心	心	×
27	うたぬ	うたぬ	打ぬ
28	しからん	しからん	しるらむ
29	よく鼓	よく鼓	よく鼓を
30	座するに	坐するに	坐する×
31	同じ	同じ	同之もは
32	しつかなる	しつかなる	静なる
33	花に	花に	はなに
34	ならさるハ	ならさるは	ならさる×
35	我荷葉共に	我荷葉ともに	我葉とも×
36	やふれに	やふれに	破レ
37	しはらくも	しはらくも	暫も

なお、名称寺本には以下のように本文に 5 か所、跋文に 2 か所の見せ消しなどがある。次頁に写真と共に掲載する。

箱根の条・・・山ミな雲にかくれけり（「け」を「タ」に直す）「けり」は泊船本のみ

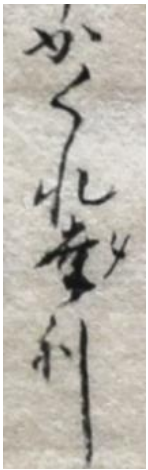
富士川の条・・・小萩か本の秋風こよひやすつらん散るらむ（「すつらん」を消す）「すつらん」は名称寺本のみ

吉野の条・・・世を忘れたる人の多クは詩にのかれ哥のにかくる（「の」を消す）「の」は名称寺本のみ

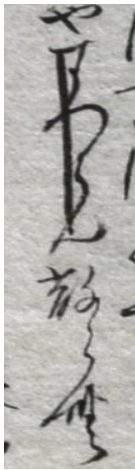
奈良の条・・・水取や氷の僧の沓の音（○の横に「の」）「の」はすべて

伏見の条・・・伏見○岸寺任口上人に逢て（○の横に「西」）「伏見の」は孤屋本のみ

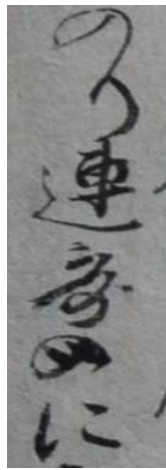
跋文・・・・・・猶むくら○とふ人もありけり（○の横に「を」）「を」は孤屋本も三康本も同様
菜とかうはしく（「菜」を「蘭」に直す）「蘭」は孤屋本も三康本も同様



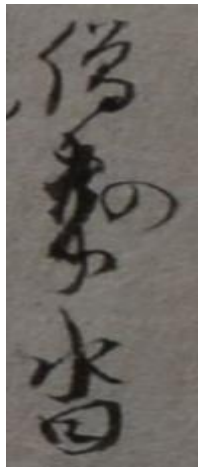
箱根



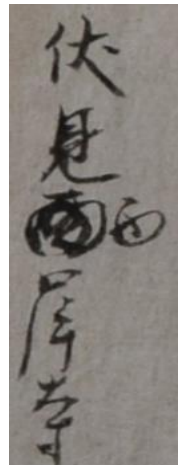
富士川



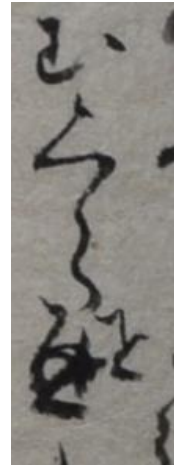
吉野



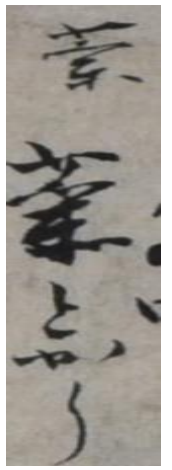
奈良



伏見



跋文



跋文

5. おわりに

『芭蕉翁生誕 370 年 平成 26 年度 (第 68 回) 芭蕉祭記念特別展 俳諧中興時代－芭蕉に帰れ－』の解説によれば、『芭蕉行脚乞食袋』は、

本文に石部の条、唱和の句部分、素堂の長文の跋（ただし署名なし）を有しているという点で、初稿本『野ざらし紀行』、自筆自画『甲子吟行画卷』のそれぞれの本文と、部分的に重なり、版本とも違う、非常に珍しい本文であるといえる。

と記されている。今回の調査により判明したことは、名称寺本は泊船本系列の諸本であり、『野ざらし紀行』の付属品である酬和の句、素堂の跋文をも収めていることより、泊船本原典もしくは孤屋本原典（孤屋本）との関わりが考えられる『野ざらし紀行』の諸本中、これまで紹介されなかった非常に珍しい本文であるといえる。いずれも原典となるものが不明のため比較検討できないが、孤屋本が転写する際の独自な表現や表記は名称寺本には踏襲されていない。このことは江戸後期に書写される時に、刊本として伝わっている泊船本や芭蕉の真蹟類に関わる資料を参考にしていた可能性もある写本だと推測される。

補記

『芭蕉行脚乞食袋』との出会いの切っ掛けを作ってくださった早川由美氏、そして、同書の調査、発表を快く承諾してくださった名称寺院主である日野恵隆氏に深謝いたします。同書の研究発表は平成 28 年 3 月 19 日、京都俳文学研究会で「名称寺所蔵『芭蕉行脚乞食袋』(『野ざらし紀行』)について」と題して行い、研究会の皆様から多くのご助言を頂きましたことを深くお礼申しあげます。その中でも小林孔氏からのご指摘にあった「『芭蕉行脚乞食袋』と孤屋本との関わり」について、1 年間調査をいたしました。新たなものを見出すこともなく、論文発表の機会が現在に至ったことを反省し、今後に繋げたく思っております。

(平成 28 年 4 月初稿、平成 30 年 1 月再稿完成)

注記 1. 名称寺に伝わる貴重品には 600 番台の番号を付しているそうである。

2. 『近世俳諧資料集成 第 4 巻』(中村俊定他編、講談社、昭和 51 年刊) より

3. 『俳人真蹟全集 芭蕉』(幸田露伴編、平凡社、昭和 5 年刊) より

4. 『古典俳文学大系 6』(阿部喜三男他編、集英社、昭和 47 年刊) より

5. 公益財団法人 克念社(山形県 鶴岡市馬場町 1-17) の上野康成氏提供「丙申堂」での展示より

6.

番号	出品(所属先)	HP より抜粋	アドレス
ア	出光美術館	平成 21 年 9 月の芭蕉展。文台オモテに二見が浦の夫婦岩と、松の絵の扇面が画かれ、ウラに「ふたみ」と前書きした掲出句（うたがふな潮の花も浦の春）と、「元禄四、芭蕉」という年記が繊細な文字で書かれている。	http://www.basho.jp/senjin/s1102-1/index.html
イ	高山市上一之町（高山市郷土館） 個人所有	雲橋社什物。県重要文化財として指定された雲橋社什物は、伊賀上野藤堂家の老臣安藤甚左衛門より譲り受けた芭蕉扇真蹟、芭蕉翁画像、二見文台及び付属三器、芭蕉翁絵詞伝 3 巻、俳諧古人真蹟巻の 10 点である。	http://www.pref.gifu.lg.jp/kyoiku-bunka-sports/bunka-geijutsu/bunkazai-zuroku/rekishi/unkyosya.html
ウ	海坂の芭蕉小祭り 【芭蕉関連の資料の展示】	風間史料会所蔵 二見形文台・三兆図・芭蕉図・美濃派俳諧資料	http://www8.plala.or.jp/koekitsuruoka/CCP017.html
エ	特別陳列 芭蕉翁の頭陀袋と俳画 特別陳列	文台（裏）よしあしの句 千代尼賛 1 脚 江戸 18 世紀（表）扇面と二見が浦図 越安居士画	http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/siryo/00exhibi/09/regular_list2.html
オ	群馬県立文書館 請求番号 565	二見之文台（芭蕉の使用した文台、西行法師の二見浦に住いた頃扇を文台として和歌を詠じたことに因む）*「竹養子より得て素輪会て、宝暦九卯ノ五月」、文台の絵有	http://www.archives.pref.gunma.jp/mkrok/list_02.do;jsessionid=CD6536CF63CD9D54CF1F5CBA2DE46CBF?smode=2&acc=2&sNo=601&sbc=-3&sbc2=-3&d_cnt_l=50&rflg=1&area=00&all=&col_01_Ta=3&col_13_Tl=1&col_13_Ta=1&col_06=&col_16_M=&col_07=&yr_Y_to=&col_01_Tl=1&cc=col004&cc=col006&col_13=&col_06_Ta=1&col_07_Ta=1&kw=&col_16=&col_16_Y=&col_08_Tl=1&col_08=&cl=&col_16_M_to=&s_item=col_16&col_08_Ta=1&col_07_Tl=1&yr_Y=&col_06_Tl=1&col_16_Y_to=&col_01=P01013

カ	象潟郷土資料館「おくのほそ道と 象潟一芭蕉を受け継ぐ文人たち」 市内・佐々木啓喜氏蔵	宗匠帽、二見形文台	http://hyper.city.nikaho.akita.jp/kyoudo/exhibition/okunohosomichi_to_kisakata2008/okunohosomichi9.html
キ	奥の細道むすびの地記念館開館記念 第4回企画展「美濃派と地域文化の隆盛」	「二見文台」	http://www.city.ogaki.lg.jp/0000000848.html
ク	個人蔵	知り合いの家に伝わる、芭蕉の「二見文台」です、文台の表面には芭蕉が今から訪れようする、まだ見ぬ二見ヶ浦を思って、彫ったと言われる夫婦岩が、裏には、芭蕉の直筆と言われる「句」が書かれています。	http://blog.goo.ne.jp/katu20515/s/%C7%CE%BE%D6%A4%CE%C5%B8%CD%F7%B2%F1
ケ	東京美術倶楽部(株)『美術商の百年：東京美術倶楽部百年史』(平成18年2月刊)	芭蕉 二見文台雪中庵伝来	http://shashi.shibusawa.or.jp/details_pages.php?sid=11670&id=327026

7. 「翻刻『銅駝御殿御文台及御改正 正風蕉門俳諧諸式執筆録 并略式心得之事』」(大阪俳文学研究会会報 39号、平成17年10月刊)
8. 山崎喜好氏『芭蕉と門人』(弘文社、昭和22年刊)、井上敏幸氏「『甲子吟行』跋文への疑義」『高知女子大学紀要』昭和48年3月刊)、濱森太郎氏『松尾芭蕉作『野ざらし紀行』の成立』(三重大学出版会、平成21年刊) 小林孔氏「孤屋本『野ざらし紀行』の奥書」『城南国文』(平成8年2月刊)を参考にした。
9. 『校本芭蕉全集』(第6巻、尾形仿編、角川書店、昭和44年刊)
10. 表中の略語に24～25頁の表の諸本名を参照のこと。